

我々が初めて出会ったのは、九月二十三日の夜十時半ごろのことだった。佐倉工業団地の近くで、路肩に自転車倒し、彼はしゃがみこんでいた。

時も場所も、事前にアリバイを用意しておいた犯罪者のように正確に覚えているのは、その夜その時刻、関東地方に大型で強い台風が接近しつつあったからだ。私はカーラジオをつけっぱなしにして、三十分ごとに放送されるニュースを聞いていたが、いつもふがいない空振りを繰り返している天気予報とは違い、台風情報は小憎らしいまでに正確だった。

予報官の言葉どおり、午後七時ごろから西風が強くなり始め、やがて暴風雨がやってくる、ライトをつけていても一メートルほど先しか見えないような有様になった。叩きつけるように降り注ぐ雨もさることながら、道路にできた水溜まりに車輪がつっこむと、ちよつとした噴水顔負けの水飛沫（みずしぶき）があがり、それがまたフロントガラスにざぼりとかかつては、視界をさえぎる。どこか安全な場所を探して車を止め、暴風雨が峠を越すまで待った方がよさそうだと、私も考え始めていた。

そのとき、彼を見つけたのだ。

私が、いつそ歩いた方が早いぐらいの低スピードで車を転がしていなければ、我々の出会いは最悪の形になっていただろうと思う。私は彼を轢いてしまい、顎（あご）をがくがくさせながら救急病院を探し回る羽目になっていたはずだ。だいたい、そんな時刻に、台風のと真ん中を、それも車ならまだしも自転車で横切ろうとしている人間がいかなど、普通は考えられない。ライトの向こうにぼんやりと浮かび上がった人影を見つけたときも、最初は、田舎道でよく見かける、警察官の形をした人形だと思っただけだった。

だが、その人影は、私の車にむかつて手を振った。警察には、バッテリーで動く警官人形を道端に据えっぱなしにしておくほどの予算はない。だから、生身の人間だとわかった。薄いビニール製の雨合羽を着ていたが、フードは頭から吹き飛び、袖も裾も暴風にはためいていた。髪が濡れて頭にびったりとはりついているうえに、豪雨に顔をしかめ目を細めているので、ストッキングをかぶった強盗のような顔に見えた。どうやら男であるらしいことと、年配者ではなさそうだということが、かろうじてわかるだけだった。

彼は道の左端にいたが、私の車が近づいていつて停まると、大急ぎで運転席側の窓に近づいてきた。窓をさげると、吹き降りが顔を打ち、私もしかめ面をしないではいられなくなつた。

「こんなところで何してるんだ？」

そのときはまだ叱（しか）るつもりはなかったが、風の轟（とどろ）きに負けないために、私は怒鳴った。

「パンクしちゃったんです！」

彼も怒鳴り返し、大雑把おろそかに自転車おんせんの倒れている方向を指した。

「動けなくなっちゃって。すみません、どこか修理のできるところまで乗せてつてくれませんか？」

「とにかく乗りなさい」

私が大声で言うと、彼は前屈まえかがみになって風に逆らいながら自転車の方へとつて返し、すべったりぶつかったりしながら自転車を起こすと、こちらへ戻ってくる。水溜まりを横切るとき、自転車の前輪が十センチほど沈んでしまい、車輪が回るたびに小さな波がたつのが見えて、私は少しばかり気味悪くなった。この台風と豪雨をみくびっていたという点では、私もこのヒッチハイカーと同じかもしれない。

「ちよっと待っててください。これ、折り畳めるんです。そしたらトランクにも乗せられるから」

「自転車なんか放はなつとけ！」

「でももつたないし……」

「あとで取りにくりやいいだろ？」

「飛ばされちゃったらどうしようかな」

私は声を張り上げた。「地べたに寝かせておきや飛んてかないよ。とにかく早く乗つてくれ！ ぐずぐずしていると置いてくぞ！」

実際、こんな場所で長く停まっていたら、うまく走りだせなくなる可能性が高かった。私の車は新品でもなく高性能でもなく、私がつともそうしてもらいたくないときを狙ねらってエンコするという、性悪な癖を持っていた。私とこの車は、刑事とタレ込み屋のように、互いを全然信頼しないまま、ただとりあえずは便利で、ほかにお代わりがないということだけでくっついてた。

「早く、早く！」私は彼をせきたてた。

彼はなんとか満足のいく位置に自転車を横たえると、走って戻ってきた。助手席のドアを開けようとして、ひどく苦労している。雨で手が滑るのかと思つて手伝うと、強風に押されてドアが開きにくいのだとわかった。

まったく前代未開だった。こんな暴風雨は経験したことがなかった。氣象予報官の「三十年ぶりの大型台風です」という台詞せりふを、なんとなく聞き過していたことを後悔した。

彼がなんとかドアを開け、身体からだを通り抜けさせるのを見計らつて、私は彼の雨合羽をつかみ、内側にひきずりこんだ。

「脚をはさむなよ！」と怒鳴るのと同時に、恐ろしいほどの勢いでドアが閉じた。コメディ映画によくあるように、閉まつたと同時に、ドア全体が壊れて落ちてしまうのではないかとさえ思うほどだった。

「あー」彼は声を出してため息をついた。「スゲエや」

私は車をスタートさせた。車輪が何度か空回りをし、悪い予感がした。ようやく、がくと前のめりになりながら動きだしたときには、思わず安堵あんどうのため息が出た。

「なんて天気だ」

私が拾ったヒッチハイカーは、全身から均等に水を滴ら^{した}せていた。耳たぶからも、鼻の頭からも。彼は顔のまわりの水滴をぐるりと手の甲でぬぐってから、やっとまともに私を見た。「どうもすみません。助かりました」

そのときにはもう、私にも、自分が拾ったのが年若い少年だということがわかっていた。ハンドルにしがみつきながら、彼の方は見ずに、額^額いてみせた。

「無鉄砲にもほどがあるぞ。こんなときに自転車^{自転車}を乗り回してるなんて。この辺に住んでるんだろ？」

「ううん。東京です」

呆^{あき}れ返った。「じゃ、自転車^{自転車}でこっちまで？」

「そうです」

「学校を休んで？」

「連休だから。明日も休みですよ」

言われてみればその通りだった。仕事柄^{がら}、そういう意味でカレンダーを意識することがないので、忘れていたのだ。

この続きは、書籍でお楽しみください。

◎注意

本作品の全部または一部を無断で複製、転載、改竄、公衆送信すること、および有償無償に拘らず、本データを第三者に譲渡することを禁じます。

個人利用の目的以外での複製等の違法行為、もしくは第三者へ譲渡をしますと著作権法、その他関連法によって処罰されます。